

加古川流域と河内

— シグザグ縄叩きは語る —

寺 岡 洋

はじめに

播磨の加古川流域に塔（三重・五重塔）のような高層建築、金堂や講堂のような大規模な構造物が造られ始めたのは7世紀後半頃からと考えられている。当時、最も大きい建物は首長（豪族）の居館か、倉庫であろうが、寺院とは外観も中身もまるで違っている。時代は遡るが、このような状況はヤマト王権の所在地であった飛鳥地域でも同じで、日本列島の建物の系譜から寺刹のような建物は誕生しない。朝鮮半島でも状況は同じであった。古代寺院は仏教とセットになる、極めて特異な外来の建築様式をもっていた。

列島では、推古天皇32年（624）に寺院46ヶ所を数えるに過ぎなかったものが、持統天皇6年（692）には、「天下の諸寺545ヶ寺を数える」に至ったという。白鳳時代に寺院バブルが起こったのであるが、地域において古代寺院の存在は甚だ不均衡である。大和・河内に多いが、朝鮮半島に近い九州が意外に少ない。

近辺の例では、難波津の北岸である阪神間（摂津国河内・武庫・菟原・八部郡）には、猪名寺廃寺、伊丹廃寺、芦屋廃寺、室内遺跡（神戸市）と4ヶ所の古代寺院跡が残るが、加古川流域（播磨国賀古・印南・賀毛・多可郡）には、阪神間の5倍にもなる20ヶ所余り知られる。

古代寺院の建立は、いくつかの条件が整わないと困難であったのではないかと考えられる。地元の条件としては、寺院を建立したいという意味をもつ集団（首長・氏族）、それも里（さと）を単位とするような狭い地域では寺院造立・維持に伴う莫大な負担に耐えられないであろうから、郡はむしろ、時には国を越えるような、相当規模になる複数の集団を組織できなければならないであろう。このような組織・ネットワークが「知識」と呼ばれる実態であったと考える。

しかし、在地の体制が整っただけでは寺院は建たない。全く未知で巨大な寺院建築のノーハウをもつ集団との提携が必須である。飛鳥時代、寺院



を建立できる技術・ノーハウを確保していたのは蘇我氏やヤマト王権を構成する士大夫と呼ばれる有力豪族層、上宮王家などの王家、そして先端技術と知識を持つ渡来系氏族であった。いずれかの集団とのネットワークがなければ寺院の建立はおぼつかない。

提携先が積極的であったと考えられる場合もある。法隆寺や四天王寺などの有力寺院が自らの権益を確保・維持するため、地方の造寺事業（知識）に関わる例もあるであろう。また、王権を担う中央の有力集団（豪族）が自らの影響力をもつ地域において寺院建立を援助したことも考えられる。さらに、朝鮮半島の集団と直接つながりを持つ集団が存在したことも否定できない。

加古川流域に多くの寺院が建立されたのは、高麗の還俗僧・恵便が居住したというような伝承をもつように、地域に早く仏教が受け入れられ、さらに寺院建立のノーハウをもつ畿内の有力集団とネットワークが存在したからではないか。

ネットワーク・知識を裏付けるモノ

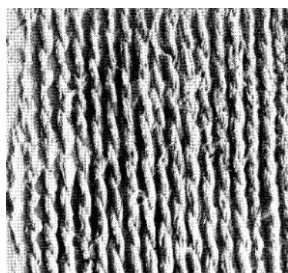
ネットワーク・知識の裏付けは文字資料が無ければ証明が難しい。西琳寺（羽曳野市）のように建立の経緯が史料で明らかになることは極く稀な例になる【注1】。殆どの寺院は礎石と古瓦が残るぐらいで、本来の寺名も分からない。

そのなかで伽藍の配置は寺院間の関連を裏付けることもある。観世音寺式【注2】と呼ばれる伽藍配置については、「鎮護国家の伽藍配置」だとの考えがある【貞清・高倉2010】。

賀毛郡に集中する、金堂前面に東西両塔を配する薬師寺式伽藍配置は、列島内でもごく限られた寺院のみが採用しており、その採用に当たってなんらかの関係があったことが推測され、取上げたことがある【寺岡2010】。広渡廃寺・新部廃寺・繁昌廃寺で、シグザグ縄叩きも共通する。

古代寺院跡から出土する遺物の大部分は瓦である。一つの寺院に必要な屋瓦は10万枚単位にのぼるであろう【注3】。軒丸瓦や軒平瓦の文様、

平瓦の特異な技法を比較することにより、ネットワークの存在に関してはすでに断片的に語られているが、今回、まとめて見直してみたい。



平瓦の「ジグザグ縄叩き」 ↑ 縄目の拡大 ～文様を意識したものか～

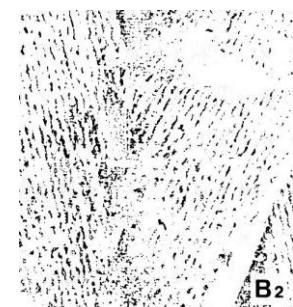
仏教寺院のことを「瓦舎（かはらや）」とも称するように、瓦は極めて目立った。日本で瓦葺きの宮殿が造られるのは藤原京（新益京（あらましのみやこ）694～710年）からで、それまでは板葺や桧皮葺などであった。ちなみに、藤原宮で必要とした瓦は200万枚以上と推定されている。

その瓦でいちばん沢山必要なのが平瓦であり、当初は、粘土紐・板を瓦桶（木型）に巻いて成形する「桶巻き」で作っていた。普通、一度に4枚の平瓦を作る。瓦桶は模骨（もこつ）と呼ばれる細長い板材を紐で連続し、瓦桶には離型材として布をかぶせるので、平瓦の凹面（屋根では上面になる）には、布目跡や稀には模骨痕などが残る。

そして、粘土に空気が入っていると窯で焼くときに破裂するので、叩き板で粘土を叩き締める。この叩き板に縄を巻いていれば縄目（上欄の図版）が、格子目の文様が刻まれていれば格子目が平瓦の凸面残る。この縄目叩きのうち、播磨と河内しか見られないのが「ジグザグ縄叩き」と呼ばれる特異な技法で、今回のテーマになる。

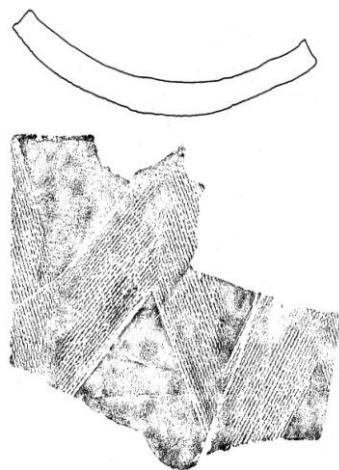
広渡廃寺の凸面縄目叩き

1973～76年に発掘調査された広渡廃寺（賀毛郡・小野市）で、ジグザグ縄叩きが取上げられた【五十川1980】。五十川氏は、「平瓦B類の凸面は、縄目叩きが、なでによって消されている場合がほとんどであるが、あらためて、凸面の広端部寄りに縄目叩きを山形（ジグザグ）にほどこすものがみうけられる」と指摘された。そして、縄目の5cmあたりの条数を計



測され、17～19条のもの【B1】と、20～22条のもの【B2】に分類された。

また、類例が「**繁昌遺跡・大寺遺跡**」で見られ、同一窯の製品とみなされた。さらに、**東條尾平（ひがんじょうおひら）廃寺**（柏原市）でも同様の手法をもった平瓦が出土していると、河内と関連することを指摘された。



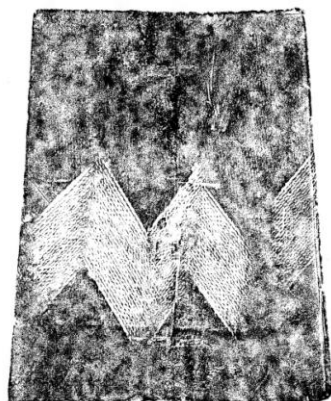
広渡廃寺では歴史公園整備に伴う発掘調査が1994～97年に行われ、B類平瓦（上図 南大門瓦溜め）が大量に出土した【西田・久語2005】。10cm四方以上の破片は15,916点にもなる。うち、ジグザグ縄叩きの点数は不明。

この二次的になされるジグザグ縄叩きは本来不要な工程にもかかわらず、手間暇かけてなされている訳である。装飾を意図したとも考えられ、軒平瓦の顎部に施文するのと同じ発想であろう。

東條尾平廃寺のジグザグ縄叩き

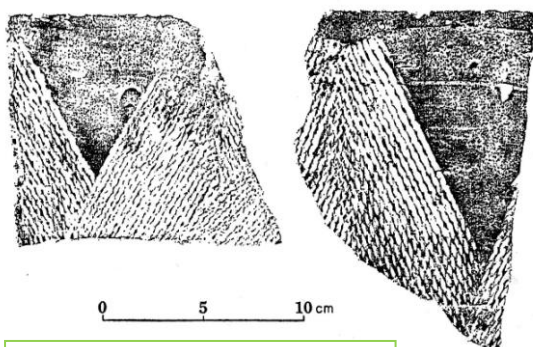
東條尾平廃寺は大和川左岸（南岸）、金剛山系の北麓に位置する（柏原市国分東条町）。西600mには河内国分寺跡が残る。数100m東は県境という場所。金属鉄工団地造成に伴い1971・72年に発掘調査され、「寺跡を証すべき遺構は検出できなかった」が、遺物に数点の丸瓦と完形品を含む平瓦があった（下図）。

「平瓦はすべて同形の縄目叩文を凸面にもち、細目の布目文様が凹面にみられる」。完形の平瓦の法量は、全長35cm・広幅26cm・狭幅24cm・広端厚20cm・狭端厚1.6cm。



新部（大寺）廃寺のジグザグ縄叩き

加古川中流の西岸、西方は青野ヶ原台地、南北に延びる微高地の舌状部に位置し、四周の展望が開ける（小野市新部町大寺）。広渡廃寺とは加古川を挟み3km弱と至近距離で、共に双塔伽藍である。互いに華麗な双塔を見通せたであろう。同じく双塔伽藍で、ジグザグ縄叩きも見られる繁昌廃寺は北西約4km地点に位置する。



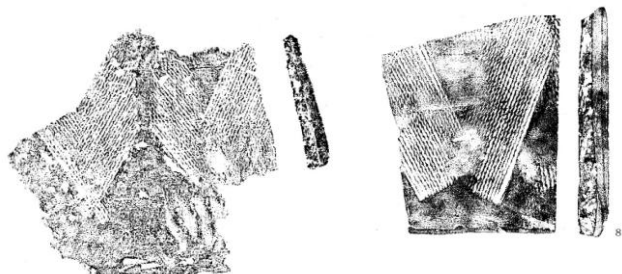
左：新部廃寺 右：繁昌廃寺

繁昌廃寺のジグザグ縄叩き

加古川には多くの支流が流入しており、支流の万願寺川の、さらに支流になる普光寺川西岸の段丘上に位置し、すぐ西は丘陵（加西市繁昌町）。

丘陵は工業団地になっており、南端に乎疑原（おぎわら）神社が鎮座する。かつてその境内に、普光寺川から発見されたと伝わる白鳳期の石造五尊像が安置されていた。1980～82年、圃場整備に伴って発掘調査され、現状は水田。

伽藍配置は双塔の薬師寺式に復元される。講堂基壇は瓦積化粧で、金堂もその可能性が高い。西側の丘陵斜面には、南から天神山、山ノ脇、尼ヶ池の瓦窯が存在する〔高井ほか1987〕。



右図：天神山窯跡出土

左図：繁昌廃寺出土

菱田哲郎氏は、繁昌廃寺のジグザグ縄叩き平瓦について、「平瓦DⅡ型式は、凸面にジグザグに縄叩きを施すという際だった特徴から、系譜関係

の推定が容易である」とされる〔菱田1987〕。

「…（播磨の**広渡廃寺**・**新部廃寺**・**繁昌廃寺**・**石守廃寺**の諸例は）いずれも布目密度や側面、端面調整などに共通性が認められ同一の工人集団の製品の可能性が高い。このジグザグに縄叩きを施す瓦は、**東條尾平廃寺**・**片山廃寺**・**智識寺跡**（柏原市）、**林廃寺**・**土師寺**・**国府遺跡**（**衣縫廃寺** 藤井寺市）、**丹比廃寺**（堺市）など、中・南河内にも分布している。播磨の例と河内の例の間でも、大きさや製作技術の上で共通性が見いだせるので、地域間の工人の移動、あるいは交流を物語るものとして重視できる」と指摘されている。

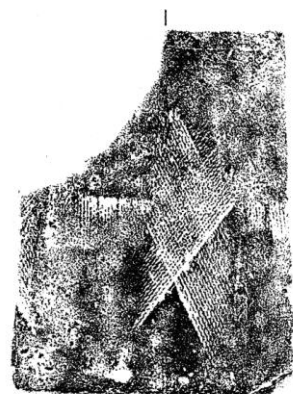
工人の移動、あるいは交流は、造寺集団のネットワークを裏付ける。

石守（いしもり）廃寺のジグザグ縄叩き

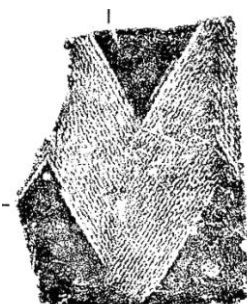
加古川下流東岸、日岡山の北東側斜面の先端部に位置する（加古川市神野町）。広渡廃寺からは12kmくらい南になり、賀古郡になる。北東1.5kmの丘陵上には西条廃寺が、3km南には野口廃寺と賀古駅家（古大内遺跡）が立地する。

1983・84年に確認調査（1・2次）〔西川2011〕、2000年には圃場整備（3次）、2002年には道路新設に伴う発掘調査（4次）〔長濱・森永2008〕が行われ、類例が増した。

右図は1・2次調査（塔・金堂）により出土し、HI類と分類された平瓦。叩き板幅約7.5cm。長さ24cm以上。桶巻き作り。全長35.7cm、広端部幅24.5cm、狭端部の幅23cm。



左図は、金堂跡から出土。叩き板の幅は約7.5cm。側面はヘラ削りする。叩き調整は分割前に施すことが分かる。



おわりに 播磨において現在知られているジグザグ縄叩き平瓦例は4ヶ寺と窯跡1ヶ所のみで、すべて加古川流域になる。河内は東條尾平廃寺しか取り上げられなかったもので、後日を期したい。

注

(1)『西琳寺文永注記』という寺に関する史料集のような文書が残されている。

(2)大宰府の観世音寺を標識とする伽藍配置で、南北棟の金堂が西に東面し、塔が東に配される様式。

(3)北面と西面が復原された土塔(堺市)に使用された瓦は、51,000枚になる。

参考・引用文献

- 五十川伸矢1980「広渡寺廃寺跡出土平瓦B類の製作技術をめぐる問題」『播磨広渡寺廃寺跡』小野市教育委員会・広渡寺廃寺跡発掘調査団
- 奥野義雄1973『東條尾平廃寺跡』元興寺仏教民俗資料研究所
- 貞清世里・高倉洋彰2010「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』30 日本考古学協会
- 高井悌三郎・堀江良弘1972『播磨大寺遺跡Ⅰ 昭和46年度発掘調査報告』小野市教育委員会
- 高井悌三郎ほか1987『播磨繁昌廃寺一寺跡と古窯跡一』加西市教育委員会
- 寺岡 洋2010「播磨の双塔伽藍からみる「知識」のネットワーク」『むくげ通信』243 むくげの会
- 長濱誠司・森永速男2008『石守廃寺』兵庫県立考古博物館
- 西川英樹2011『石守廃寺発掘調査概要報告書』加古川市文化財研究センター
- 西田 猛・久語紀子2005『国史跡広渡廃寺跡 発掘調査報告書』小野市教育委員会
- 菱田哲郎ほか1982「繁昌廃寺遺物調査報告」『とれんち』34 京大考古学研究会
- 菱田哲郎1987「Ⅳ出土遺物 1 瓦類」『播磨繁昌廃寺一寺跡と古窯跡一』加西市教育委員会